

## 固有名と記憶(2)

神谷 英二\*

**要旨** 固有名は人間の記憶とどのように関わるのか。固有名は集合的記憶にどのような影響を与えているのか。本研究は、ヴァルター・ベンヤミンの言語論を主要な理論的手がかりに、「固有名と記憶」について思索を進め、これらの問いに応えるものである。本論文は、本研究全体の第2部にあたり、固有名のうち「まちの名」に焦点を絞って論究している。まず、第1部の最後に提示した、固有名と記憶の関わりについて研究を進めるための導きの糸を確認した。次に、遊歩者がまちの名の磁力に惹きつけられるあり方を描写した上で、レヴィナスのテキスト読解における「懇請」の概念を援用し、アウラにも言及して、その言語論的な原理を解明し、まちの名の磁力が世界の根源への門でもあることを示した。その上で、まちの名が弁証法的形象であることを示し、「歴史の原現象」としての、その歴史性を明らかにした。

**キーワード** 固有名 記憶 まち アウラ 弁証法的形象 ベンヤミン

### はじめに

ここに『亡命の住所録1933-1940』という本がある。これは、バリ亡命中のヴァルター・ベンヤミンによって親しい人の名と土地の名が刻まれた住所録を写真で再現している。固有名の塊として不思議な魅力を湛えた書物である。例えば、Sの項目には、親友ゲルシヨム・ショーレムの名と彼のイエルサレムの住所が記されている(Scholem Jerusalem Recharge B Rambon Street 51) (Fischer-Defoy 2006: 58f.)。亡命の日々、ベンヤミンにとって、この

住所が大切な土地の名として記憶され、繰り返し繰り返し宛名として書かれていたのである。

この「イエルサレム」という土地の名は言うまでもなく、眩暈がするほどの多くの記憶と結びついている<sup>(1)</sup>。信仰の記憶、望郷の記憶、殺戮の記憶、政争の記憶。地名が多くの記憶の手がかりとなるものであることは確かである。個人の記憶にとどまらず、集合的記憶の拠り所となり、忘却の始まりと記憶の痕跡のしるしにもなり得るものである。

また、「ショーレム」という人名が、ベンヤミンの個人的記憶にとどまらず、20世紀のユ

\* 人間社会学部一般教育等教授

ダヤ思想やカバラに関心をもつ人々をはじめとする、多くの同時代人やわたくしたち現在世代の集合的記憶に大きな役割を果たしてきたことも疑いのないことである。

それでは、哲学は、こうした経験をどのように記述し得るのだろうか。固有名は個人的記憶とどのように関わるのか。集合的記憶にどのような影響を与えているのか。忘却や記憶の痕跡にどのように浸透しているのか。本研究は、ベンヤミンの言語論を主要な理論的手がかりとして、「固有名と記憶」について思索を進め、これらの問いに答えるものである。

本論文は、本研究全体の第2部にあたり、固有名のうち「まちなみ」<sup>(2)</sup>に焦点を絞って論究する。論述の順序として、まず、第1部（神谷2010）の巻末で提示した、固有名と記憶の関わりについて研究を進めるための導きの糸を確認する。次に、遊歩者がまちなみの磁力に惹きつけられるあり方を描写した上で、レヴィナスの「懇請」を援用し、アウラにも言及して、その言語論的な原理を解明する。その上で、まちなみが弁証法的形象であることを示し、「歴史の原現象」としての、その歴史性を明らかにする。

## 1 思索の手がかり

固有名と記憶の関わりを探究するためには、導きの糸となるような固有名の経験が必要である。ここではまちなみと人名に関わるベンヤミン自身の経験を示しておこう。

ベンヤミンは、ベルリンでの幼少時代、街路名について、日々独特の経験を積み重ねていた。『1900年頃のベルリンの幼年時代』<sup>(3)</sup>のなかには、「ブルームスホーフ12番地」(Blumeshof 12)に次のような興味深い記述がある。

「この通りの名は、ブルームス・ホーフ (Blumes-Hof) ではなく、ブルーム・ツォーフ (Blume-zof) と発音された。それで、このすまいに足を踏み入れると、私の目にはまず、襪がいっぱいついた被いのなかから、とても大きなブラッシュ製の花 (Plüschblume) が飛びこんできた。」(GS VII, 411)

また、同じ『ベルリンの幼年時代』のなかの「蝶を追う」という短文では、ベンヤミン家の夏の別荘があったブラウハウスベルク (Brauhausberg) という地名を、地理的な場所を指示する単なる記号ではなく、「大人になった者を容易に近づかせないような解き難い魔力」(GS VII, 393) をもった固有名として記述している。<sup>(4)</sup> (cf. 道簾 1997: 101f.)

『ベルリンの幼年時代』、『ベルリン年代記』、『一方通行路』は、メニングハウスの指摘するように、「名前神話」に満ちており、これらのテキストの多くは「個々の名や音に幼年時代の経験という一つの全体的宇宙を通電させることによって成り立っている。」(Menninghaus 1986: 60) しかし、こうしたいわば「街路のシニフィアン」(鹿島 1996) を巡る経験は、彼の幼年時代に限られたものではない。『パサージュ論』のなかには街路名を巡るさまざまな経験が「P パリの街路」の断章群として纏められており、そこにはさらに、レオ・シュピッツァー『文体研究』のなかから、次のような引用も書き留められている。

「固有名も概念として作用するのではなく、純粋に響きの上で作用するのである。固有名はクルティウスの表現を用いれば、『未記入の用紙』である。ブルーストはこれに感覚を記入することができる。」[P1a, 7]

次に、人名に関わる経験についても注目

すべきものを一つだけ示しておく。『ベルリン年代記』のなかに、「知り合いの原型」(Urbekanntschaft) というよく知られたエピソードがある。

それは彼が、ある午後、パリのカフェ・ド・ドゥ・マゴで人を待っていた時の経験である。「その時突然、有無を言わせぬような力で、自分の生涯の図式 (graphisches Schema) を描こうという考えに捉えられたのである。しかも同時に、その作成の仕方まではっきりと分かったのであった。それは、私が自分の過去を探ろうとしたごく単純な問いかけであって、答えは、おのずから出てくるように、私に取り出した一枚の紙の上に描き出されたのだった。1、2年のうちに、この紙片を紛失した時、私は自分を慰めるすべを知らなかった。二度と再び私は、その時、一連の系図にも似て目の前に生まれてきたものを作成することができなかった。しかし今、まさに再現はできなくとも、頭のなかでその見取図を復元しようとする時、私はむしろ迷宮として考えたいのだ。迷宮の謎の中心にある部屋に住んでいるものが、自我にしろ運命にしろ、それはここではどうでもいい。しかし内部に通じるたくさんの入口はそれだけいっそう大事なのだ。これらの入口を私は知り合いの原型と呼ぼう。その入口の一つ一つが、他人を介してでなく、隣人関係や血縁関係や同窓関係や人違いや旅行の道連れなど (中略) によって私の出会ったひとりの人間との知り合いの図形的象徴なのである。」(GS VI, 491)

これはいわば人名で埋め尽くされた、ベンヤミンの生涯の図式であると言えるだろう。彼は、知り合いの原型の数だけ迷宮への入口があると述べている。この迷宮は、実は記憶の迷宮でもある。そして、この図式に描かれた人名の

迷宮は、単に非空間的・非時間的な形象群ではない。これは、都市の拡がり、個人的記憶と集合的記憶が浸透した人名の連なりからなる象徴的地図である。いわば迷宮への門の役割を果たす、変容した住所録である。

## 2 遊歩者とまちの名の磁力

まちの名に、行政区分を表記する記号以上の過剰な意味を見出すのは誰なのか。誰がベンヤミンと同じような、まちの名の経験をしようだろうか。答えは「遊歩者」である。

ベンヤミンが「19世紀の首都・パリ」に見出した、目的をもちずに街路を彷徨う人物像としての遊歩者は、認識論的主体としての近代的自我と同一ではない。遊歩者は、「観察する人」、「研究する人」であると考えられている。なるほど確かにこれは遊歩者をもつ認識論的主体の側面を表している。しかし、遊歩者は同時に、「陶醉する人」でもある。この点を『パサージュ論』にしたがって見てみよう。

「長い時間あてもなく街を彷徨った者はある陶醉感に襲われる。一步ごとに、歩くこと自体が大きな力をもち始める。それに対して、立ち並ぶ商店の誘惑、ビストロや笑いかける女たちの誘惑はどんどん小さくなる。次の曲がり角、遙か遠くのこんもりした茂み、ある通りの名前などがもつ磁力がますます抗い難いものとなってゆく。やがて空腹に襲われる。だが、空腹を満たしてくれる何百という場所があることなど、彼にはどうでもいい。禁欲的な動物のように、彼は見知らぬ界限を徘徊し、最後にはへとへとに疲れ果てて、自分の部屋に——彼にはよそよそしいものに感じられ、冷ややかに迎え入れてくれる自分の部屋に——戻り、くずおれ

るように横になるのだ。」[M1, 3]

さらに、遊歩者におけるこうした陶酔は、現在の経験のみに閉じ込められたものではないことが重要である。

「遊歩者が街を徘徊する時に耽っているあの追憶としての陶酔の素材となるのは、彼に感覚的に見えるものだけではない。この陶酔はしばしば、ただの知識を、ほこりをかぶった資料さえも、自ら経験したり生きたものであるかのように吸収し尽くすのである。こうした感じ取られた知識というのは、何よりも口伝えによって人から人へと伝わるものである。ところが、こうした知識は19世紀においてはほとんど気が遠くなるほどの膨大な量の文献のなかに定着するようになった。『パリの街路という街路を、家という家を』描き出したルーフヴ<sup>6)</sup>以前でも、夢見心地ののらくら者というパリ風景のなかの点景は描かれていた。こうした文献を研究するのは、夢見ることに没頭すべく用意された第二の人生のようなものである。そして、彼がそうした本から得たことは、アペリティーフの前の午後の散歩の際にはっきりした姿(=形象)をなす。実際に彼は、パリに最初の乗合馬車が走った頃、ノートルダム・ド・ロレット教会の裏のところで三頭目の加勢の馬が馬車につながれたことを知ったなら、そこの急坂を靴の底でもっと強烈に感じるはずではなかろうか。」[M1, 5]

ここで語られる陶酔は、現在に閉じ込められたような、その場限りの陶酔ではない。この陶酔は過去へと開かれた、「追憶としての陶酔」でもある。そして、この「追憶としての陶酔」の素材は、ただ遊歩者が街路を彷徨う時に、目の前に現われるだけでなく、19世紀においては知識として膨大な量の文献のなかに定着する

ようになったのである。それゆえ、遊歩者であるベンヤミンは、パリを遊歩するだけでなく、パリの国立図書館の閲覧室で、文献のなかを彷徨いながら、「文学的モンタージュ」[N1a, 8]の方法を駆使して、『パサージュ論』の仕事に取り組むことになるのだ。

さらに、『19世紀ラルース百科事典』によれば、そもそも、「遊歩者は怠け者の一様態である」(Larousse 1872: 436)とされている。しかしながら、同時に「遊歩者の怠惰には、独創的で芸術的な側面がある。」これは、特定の職業に就くように、「遊歩者になる」というようなものではなく、「遊歩者であることができる」だけである。

それでは、いかにして遊歩者は、「独創的で芸術的な側面」をもち得るのだろうか。ここでは、彼らがぶらぶら歩きながら、何を見て、何を生み出しているのかが問題なのである。

「そうした遊歩者の見開いた目、そばだてた耳は、群衆が見にやって来るものとは全く別のものを捜しているのだ。成り行きで発せられた言葉から、あのでっち上げることができないため実地に捉えなくてはならない人物の特徴の一つが彼にはっきりとわかることになるだろう。あのととても素朴に注意を向けている顔付きをもとに、画家は夢見ていた表情を描くことだろう。他の人の耳には何でもないある物音が、音楽家の耳を打ち、ある和声を思い付かせるだろう。夢想到に耽った思索家、哲学者にとってさえ、そうした外の喧騒は有益で、嵐が海原をかき混ぜるように、その諸観念を混ぜ合わせ揺さぶることだろう。……天才たちの大部分も偉大な遊歩者だったのだ。ただし、勤勉で実り豊かな遊歩者だったのである。」(Larousse 1872: 436) [M20a, 1]

すなわち、『19世紀ラルース百科事典』に示されている理解では、遊歩者は単なる暇人でも怠け者でも野次馬でもない。遊歩者は観察する人であり、研究する人でもありうるということになる。しかし、これは客観的に対象を捉える近代的な認識主体を意味するのではなく、陶醉しつつ、観察し、研究する遊歩者のあり方を描写しているのである。彼は傍観者たる観察する人として、まちを彷徨うのではなく、勤勉で実り豊かな遊歩者として、陶醉しながら創造するのである。

### 3 「都市は街路名によって言葉の宇宙となる」

それでは、これから街路名を巡るさまざまな経験についてのエクリチュールを蓄積した『パサージュ論』断章群Pを読み込んでいこう。この作業により、前述のように輪郭が明瞭となった遊歩者に、まちの名がどのような原理でどのように作用しているのかが明らかになる。

「都市は、普通ならごくわずかな言葉、すなわち特権階級の言葉だけが近づき得るものを、すべてのとは言わないまでも、多くの言葉にとって接近可能なものにした。(中略)言語革命が最もありふれたもの、すなわち街路によって遂行されたのである。——都市は街路名によって言葉の宇宙となる。」[P3, 5]

街路名によって言葉は都市空間に浸透し、遊歩者は都市を読むことが可能となる。街路名には、空間と時間の刻印がなされている。

「パリは活動的な都市、つねに動いている都市として語られてきた。だが、このまちにおいて、都市構造がもつ生命力に劣らず重要なのは、街路や広場、あるいは劇場の名前に潜む抑

止し難い力だ。こうした名前はいくら場所が変化しても残り続ける。」[P1, 1]

ベンヤミンは、パリのまちの名を巡る経験をたくさん書き残している。ここでは、特に印象深い、パリのベルヴィルにある「モロッコ広場」(la place du Maroc)の経験を取り上げよう。パリにある広場名でありながら、「モロッコ」の名が強い喚起力をもってベンヤミンに迫ってくる。その場の光景とアレゴリー的な意味が交差し、そこにある「荒涼とした石の山」は「モロッコの砂漠」や「植民地帝国主義のモニュメント」としても感じられたのである。

「こうしたヴィジョンを引き起こすことができるのは、大抵の場合、麻薬に限られている。ところが実際には街路名もこうした場合に、私たちの知覚を押し広げ、多層的にしてくれる陶醉を起こすものとなる。街路名が私たちをこうした状態に誘ってくれる力を喚起力と呼びたい。——だがそう言うだけでは言い足りない。なぜならば、連想ではなくイメージ(形象)の相互浸透がここでは決定的だからである。」[P1a, 2]

本研究の第1部で明らかになったように、ベンヤミンにとって、言語とは、「精神的内容の伝達をめざす原理」(GS II, 140)を意味している。人間の言語の本質とは人間の言語のことであり、人間の言語は、事物の言語、すなわち「言語一般」とは異なるものである。人間の言語は、言葉で自己を伝達する。そして、人間は人間以外のあらゆる事物を名づけることによって、伝達可能である限りにおいて、自己の精神的本質を伝達するのである。ベンヤミンは次のように断言する。

「人間の言語的本質とは、人間が事物を名づけることをいう。」(GS II, 143)

そして、事物の言語的本質に関するわたくしの研究(神谷 2010: 17f.)によれば、事物は名づけられることによって、自己を人間に伝達すると言うことができるのであった。したがって、街路を名づけることによって、都市は人間にとって精神的本質を伝達する言語現象となり、街路は自己を人間に伝達するのである(cf. 多木 2003b: 21)。

ベンヤミンはこうした初期言語論での「名づけ」の特権性は保持しつつ、後には文字像や音声としての言語の物質性を重視するようになる(近森 2007: 78f.)。したがって、『パサージュ論』では次のように指摘されることになる。

「街路名に潜む感覚性。それは普通の市民にとってどうにか感じ取れる唯一の感覚性である。」[P1, 10]

それでは、感覚的なものであるならば、街路名は普通の市民にも遊歩者に対するのと同じように働きかけるのだろうか。『ベルリンの幼年時代』の「ティーアガルテン」を読むと、都市は言葉の宇宙であるにしても、まちの名はいつでもどこでも誰にでも同じように働きかけてくるものではないことが明らかになる。

「森のなかで道に迷うように都市のなかで道に迷うには、習練を要する。この場合、通りの名が、枯れ枝がポキッと折れるあの音のように、迷い歩く者に語りかけてこなくてはならないし、旧都心部の小径は、彼に山あいの谷筋のようにはっきりと一日の時の移ろいを映し出してくれるものでなければならぬ。」(GS VII, 393)

したがって、「ある通りの名前などがもつ磁力がますます抗い難いものとなってゆく」のは、習練を積んだ遊歩者に生じる、いわば特権的な出来事であることが分かる。実際、ベンヤミン自身も「迷宮を彷徨うこの技術を私が習得

したのは、ずっとのちのことである。」(ibid.)と語っている。

もちろん普通の市民も街路名に何かを感じてはいる。フランス革命期に理性に基づいて強引に行われた街路名の変更が抵抗を受けたのもこの感覚性の故なのである。「サントノレ通り」(RUE SAINT-HONORE)を、理性の命令にしたがい、反教会主義に基づいて、「オノレ通り」(RUE HONORE)と改名したところで、「フランス人の耳には耐え難い発音上の軋みが生じ」、長続きはしなかったのだ[P1, 6]。これは街路の敷石には何も感じない市民に対しても、街路名は何かを触発しているということであり、それほどに固有名の感覚性が強いことを示している。しかしながら、まちの名の磁力は感覚性だけに由来するものではない。群衆のなかで、まちの名の磁力を発見するのは遊歩者のみである。

#### 4 まちの名と「懇請」

以上のように遊歩者が街路名に接する仕方は、どのように名づけるべき行為なのだろうか。知覚なのか、認識なのか、あるいは読解なのだろうか。

ここで、わたくしはレヴィナスのテキスト論における「懇請」(sollicitation)という概念を導入する。これは、ある特有の時間的・空間的あるいは歴史的・場所的具體性を伴った読み手がテキストのうちへ生身の実存により介入することを指している(内田 2001: 64)。テキストを読解する際に、主体と対象は一方的な能動-受動の関係にあるのではなく、読解が深まるに応じて、主体も組み替えられ、それが対象となるテキストの解釈に反映されるという双方向

的で生成的な関係にあると考えられている（近森 2007: 70）。彼は『聖句の彼方』のなかで、次のように述べている。

「解釈は本質的にこの懇請を含んでいる。この懇請なしでは言明のテクスチュアのうちに内在する『語られざること』（non-dit）はテクストの重みの下に息絶え、文字のうちに埋没してしまうだろう。懇請は個人から発する。目を見開き、耳をそばだて、解釈すべき章句を含むエクリチュールの全体に注意を向け、同時に実人生に——都市に、街路に、他の人々に——同じだけの注意を向けるような個人から。懇請は、そのかけがえのなさを通じて、そのつど代替不能の意味を記号から引き剥がすことのできる個人から発する。」（Lévinas 1982: 136）（cf. Buck-Morss 1989: 233）

読解や註解は、具体的で、固有な、生々しい読み手の現実に即して進められるのである。ここでは、読み手の存在そのものも触発され、変容を被る。陶酔する人として、遊歩者がまちの名を読む行為は、まさにこの「懇請」である。

「言明の『意味し得ること』（pouvoir-dire）は『意味していること』（vouloir-dire）を超えている。言明はそれが包含し得る以上のものを包含している。」そして、「おそらく汲み尽くすことのできない意味の過剰は、文の統辞構造のうちに、語群のうちに、音素や文字のような語のうちに、語ることのこのあらゆる物質性のうちに封じ込められており、潜在的な仕方ではつねに何かを意味し続けているのである。」（Lévinas 1982: 135）

懇請において、この「意味の過剰」が読み取られる。そして、まちの名がもつ磁力はまさにこの過剰、「代替不能の意味」に由来するのである。

## 5 まちの名とアウラ

懇請によって遊歩者が読みとり聞きとる、こうしたまちの名の磁力には、アウラ（Aura）が伴っているとわたくしは考える。例えば、ブラウハウスベルク（Brauhausberg）という地名がもつ「大人になった者を容易に近づかせないような解き難い魔力」（GS VII, 393）は、アウラによるものにほかならない。

このアウラとは何か。ここではアウラ概念がベンヤミンの著作において初めて定義された『写真小史』の記述を見てみよう。

「そもそもアウラとは何か。空間と時間の織りなす不可思議な織物である。すなわち、どれほど近くにてあれ、ある遠さが一回的に現われているものである。夏の真昼、静かに憩いながら、地平に連なる山なみを、あるいは眺めている者の上に影を投げかけている木の枝を、瞬間あるいは時間がそれらの現われ方に関わってくるまで、目で追うこと——これがこの山々のアウラを、この木の枝のアウラを呼吸することである。」（GS II, 378）

ここに記されている「ある遠さが一回的に現われているもの」とは、空間のなかに、ある瞬間に、時間的な遠さが現われることを意味している。

それでは、こうしたアウラはいかなる原理によって生じるのか。ここでの鍵は、「まなざし」である。

「まなざしには、自分が見つめるものから見つめ返されたいという期待が内在する。この期待が満たされる時、まなざしには充実したアウラの経験が与えられる。」（GS I, 646）

この「期待」は、言葉の普通の意味での視覚に伴うまなざしにだけではなく、それと同様

に、「思考の領域での注意深さという志向的まなざし」(GS I, 646)にも付随し得ると考えられている。したがって、見つめられている者、あるいは見つめられていると思っている者は、まなざしを開くのである。それゆえ、「ある現象のアウラを経験するとは、この現象にまなざしを開く能力を付与すること」(GS I, 646f.)である。そして、こうした原理は「志向的まなざし」においても同様なことから、まちな名を読むだけでなく、それを聞く際にも当てはまることである。

この「まなざし論」の基底には、彼独自の認識論が存在する。それを理解するためには、『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』において、ロマン主義の対象認識についての理論の根本命題に関する最も精密な形式として提示される、次の一節が不可欠である。

「ある存在者(Wesen)が他の存在者によって認識されることは、認識されるものの自己認識、認識するものの自己認識、および、認識するものがその認識対象である存在者によって認識されることと、同時に起こる。」(GS I, 58/WN 3, 63)

こうした認識のあり方に基礎づけられ、まなざしはアウラを生み出すのであり、それはまちな名への志向的まなざしにおいても同じなのである。

ベンヤミンは、アウラの内容は「根源」に強く関わっていると考えている。アウラは、単に複製技術に対置された「いま、ここ」の一回性の現前に還元されるものではなく、歴史的なカテゴリーである「根源」を照射する、いわば光である(小林 1991, 228)。

幼年時代のベンヤミンには、童話に出てくる「レーレン小母さん」(die Muhme Rehlen)

が「仮装したレーレン」(die Mummerehlen)という精霊になってしまったという体験に関連して、人名の例ではあるが、ベンヤミンはこの「固有名のアウラと根源」という論点に関して重要な示唆を与えている。

「この誤解のために、私の目に映る世界の様相が変わることになった。といっても、うまい具合に、である。この誤解によって、世界の内奥に通じる道が、いくつも教示されることになったのだ。」<sup>[7]</sup>(GS IV, 260f.)

これこそ、固有名の物質性と感覚性に基づくアウラが世界の根源へ通じていることを示す好例である。

## 6 まちな名と形象

次に、まちな名と記憶や歴史との関わりについて考察するためには、形象(=イメージ)(Bild)の歴史性について探究することが重要になる。ある土地の過去をすべて含んだものとして、まちな名も形象となるとわたくしは考えている。

ベンヤミンは、「形象」という語だけでなく、「弁証法的形象」(dialektisches Bild)という表現をしばしば用いている。例えば、『パサージュ論』に書き留められた、次の断片を見てみよう。

「過去がその光を現在に投射するのでも、また現在が過去にその光を投げかけるのでもない。そうではなく形象のなかでこそ、かつてあったものはこの今と閃光のごとく一瞬に出会い、一つの状況を作り上げるのである。言い換えれば、形象は静止状態の弁証法である。なぜならば、現在が過去に対してもつ関係は、純粋に時間的・連続的なものであるが、かつてあったものがこの今に対してもつ関係は弁証法的だ

からである。つまり、進行的なものではなく、  
 形象であり、飛躍的である。——弁証法的な形  
 象のみが真の（つまりアルカイックではない）  
 形象である。」[N2a, 3]

この概念を理解する鍵は歴史性である。ベン  
 ヤミンは、現象学における本質と比較しつつ、  
 この点を詳細に論じている。

「形象を現象学における『本質性』と区別す  
 る点は、形象がもっている歴史的な指標である。  
 (中略) 形象が歴史的な指標を帯びているとい  
 うことは、ただ単に形象がある特定の時代に固  
 有のものであるということのみならず、形象と  
 いうものは何よりもある特定の時代においては  
 じめて解読可能なものとなるということの意味  
 している。しかも、『解読可能』となるという  
 ことは、形象の内部で進展する運動が、特定  
 の危機的な時点に至ったということなのである。  
 そのつどの現在は、その現在と同時的なさまざ  
 まな形象によって規定されている。そのつどの  
 今は、ある特定の認識が可能となる今なのであ  
 る。この今においてこそ、真理には爆発せんば  
 かりに時間という爆薬が装填されている。(中  
 略) 解読された形象、すなわち認識が可能とな  
 るこの今における形象は、すべての解読の根底  
 にある、批判的・危機的で、危険な瞬間の刻印  
 を最高度に帯びているのだ。」[N3, 1]

このように、「形象が歴史的な指標を帯びて  
 いるということ」は、ただ単に形象がある特定  
 の時代に固有のものであるということにのみと  
 どまるものではない。これは、形象というもの  
 は何よりもある特定の時代においてはじめて解  
 読可能なものとなるということの意味してい  
 る。しかも、「解読可能」となるということは、  
 形象の内部で進展する運動が、特定の危機的な  
 時点に至ったということなのである。

そもそも「弁証法的形象」は、ベンヤミン固  
 有の造語である (Hillach 2000: 186)。この概  
 念を解釈するために、ベンヤミンによるアドル  
 ノからの引用を見てみよう。

「弁証法は形象において静止し、歴史的に最  
 も新しいもののなかに、とうの昔に過ぎ去った  
 ものとしての神話を、すなわち、根源の歴史と  
 しての自然を引用するのである。それゆえ、(中  
 略) 弁証法と神話の区別をなくすような形象は、  
 まさに『大洪水以前の化石』なのだ。こうした  
 形態は、ベンヤミンの表現を使って、弁証法的  
 形象と称してもよいかもかもしれない。」<sup>(8)</sup> [N2, 7]

ここから読み取れるように、ベンヤミンにお  
 いては、「弁証法的形象」とは、歴史の連続を  
 破壊する「引用」を通じて構成される過去の形  
 象のことである。そして、この概念は、ゲーテ  
 の「原現象」やライプニッツの「モナド」に結  
 びつけられる。まず、ゲーテの「原現象」につ  
 いての言及を見よう。

「弁証法的な形象とは、ゲーテの分析対象に  
 対する要求、すなわち真の総合を提示するとい  
 う要求にかなうような歴史対象の形式である。  
 それは歴史の原現象である。」[N9a, 4] そし  
 て、悲劇論で用いた「根源」というベンヤミン  
 の概念は、「ゲーテの基本概念の、自然の領域  
 から歴史の領域への厳密かつ異論の余地なき転  
 用」である。「根源、それは原現象という概念を、  
 異教的な観点で捉えられた自然の脈絡から、ユ  
 ダヤ教的に捉えられた歴史のさまざまな脈絡に  
 移し入れたものである。」[N2a, 4]

さらに、モナドに関しても次のように述べら  
 れる。

「歴史の事象を歴史の流れの連続性からもぎ  
 取ることが要求されるのは、そのモナド的構造  
 に基づいている。このモナド的構造はもぎ取ら

れた事象においてはじめて露わになる。言い換えれば、このモノダ的構造が露わになるのは、歴史における対決という形態を通してなのである。この対決が歴史的事象の内部（いわば内臓）をなしていて、諸力や関心の全体が新たに若返った形でこの対決に加わってゆく。この歴史的事象のもっているモノダ的構造のおかげで、歴史的事象は自らの内部に自分固有の前史と後史が写し出されているのを見出すのである。」[N10, 3]

ここから、「弁証法的形象」は、過去のすべてを潜在的に含んだ「歴史の原現象」または「モノダ」として、歴史における対決という形態を通して、歴史のすべてを新たに見つめ直す可能性の地平を現在において開くものであることがわかる。(cf. 柿木 2008: 455f.)

遊歩者にとっては、まちな名は無時間的で理念的な記号ではない。それは、弁証法的形象となり、歴史的事象としてその内部に前史と後史を写し出し、「歴史のすべてを新たに見つめ直す可能性の地平を現在において開く」ことが可能である形象の一つなのである。

## 7 アーシャ・ラツィス通りとアゲシラウス・サンタンデル一次の研究課題への通路

ここに、ベンヤミン自身が人名から架空の街路名を創造した興味深い試みがある。

この道の名は  
 アーシャ・ラツィス通り (ASJA-LACIS-STRASSE)  
 この道を著者のなかに  
 技師として  
 切り拓いた女性の名に因んで<sup>(9)</sup>  
 (GS IV, 83/WN 8, 9)

この道は、どこへ向かうのか。なぜ一方通行なのか。この「一方通行路」という道路標識は、誰が何のためにたてたのか。<sup>(10)</sup> 執筆の年代と経緯から考えて、殺戮と破滅へと向かう一方通行を暗示していることは確かである。しかしながら、遊歩者は、道路標識に従わず、まちな名が放つアウラに陶酔しつつ、過去の形象に未来を見通しつつ、この道を怠惰にかつ創造的に彷徨うことができる。そして、「機敏な言語」(GS IV, 85/WN 8, 11)によって、現在の瞬間に働きかけ、まちな物語を描写することができる。

この名が「アーシャ・ラツィス通り」ではなく、「ユーラ・コーン通り」であったならば、通りに並ぶ家や店や品物は全く変わってしまうのだろうか。アーシャ・ラツィスとのカプリ島での出会い<sup>(11)</sup>は、彼にどのような道 (Straße) を拓き、どのような刻印が『一方通行路』に記されているのだろうか。また、この名がもつ不思議なアウラは、どのような根源へとつながっているのだろうか。まちな名と人の名が相互に浸透することにより、個人的記憶と集合的記憶に何をもたらすのだろうか。

また、原理的に想起し得ない記憶について考えようとする、[アゲシラウス・サンタンデル] (Agesilaus Santander) という名が迫ってくる。そもそもこの名は、固有名なのかどうか。命名者以外はその存在自体を誰も知らないし、認識すらできない。しかし、確かに存在する名。『ヴァルター・ベンヤミンと彼の天使』のなかで、ショーレムが、Der Angelus Satanasのアナグラムであると看破した名。<sup>(12)</sup>

ここに、本研究の次の課題が浮かび上がっている。今ここで、わたくしは、遊歩者として、「救済としての歴史認識を行う歴史の主体」(神谷 2009: 76)として、これらの問いへ応答す

る責任を課せられたのである。

(以下、「固有名と記憶(3)」に続く。)

## 凡 例

- (1) ヴァルター・ベンヤミンの著作からの引用箇所は、  
( ) 内にGSの略号の後に、以下の全集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Unter Mitw. von Theodor W. Adorno hrsg. von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, Suhrkamp, 1972-1989.

ただし、『パッセージ論』(*Das Passagen-Werk*) 所収の草稿群については、[ ] 内に整理番号を記すことで示す。

なお、『一方通行路』、『1900年頃のベルリンの幼年時代』、『ベルリン年代記』については、以下の単行本も参照している。

Benjamin, Walter (1928) : *Einbahnstraße*, Ernst Rowohlt.

— (1962) : *Berliner Kindheit um Neuzehnhundert*, Suhrkamp.

— (1970) : *Berliner Chronik*, Suhrkamp.

- (2) ヴァルター・ベンヤミンの書簡からの引用箇所は、  
( ) 内にGBの略号の後に、以下の書簡集の巻数をローマ数字で、頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Gesammelte Briefe*, hrsg. von Theodor W. Adorno Archiv, Suhrkamp, 1995-2000.

- (3) 新たに刊行が開始された『作品と遺稿』からの引用箇所は、( ) 内にWNの略号の後に巻数と頁数をアラビア数字で記す形式で示す。

Walter Benjamin, *Werke und Nachlaß, Kritische Gesamtausgabe*, im Auftrag der Hamburger Stiftung zur Forderung von Wissenschaft und Kultur hrsg. von Christoph Godde und Henri Lonitz in Zusammenarbeit mit dem Walter

Benjamin Archiv, Suhrkamp, 2008-.

- (4) ベンヤミンのテキストからの引用に際しては、既存の邦訳書を適宜参照したが、訳文は必要に応じて神谷自身が訳し直している。

## 註

- (1) アライダ・アスマンによる「場所の記憶」に関する研究を参照のこと (Assmann 1999: 298f.)。ここでは、イェルサレムはテーバイと並んで、「典型的な記憶の場所」とされている。

- (2) 本論文では、「土地の名」、「都市名」、「街路名」を空間的・地理的拡がりをもつものにつけられた固有名として包括的に論じる際には、「まちの名」と表現することにする。

- (3) 『1900年頃のベルリンの幼年時代』からの引用は、原則として、1981年にパリの国立図書館で発見された「最終稿」(Fassung letzter Hand) による。これはベンヤミンが亡命のためにパリを去る時、この図書館の司書であったジョルジュ・バタイユに託して、ナチスの目を逃れた原稿群に含まれていたものである。

- (4) このブラウハウスベルクという地名について、『ベルリン年代記』では、次のように語られている。「この言葉がうちに含むものを捉えようとすることは、ほとんど不可能である。子どもと大人という二つの言語領域の境界に位置するこの種の言葉は、詩の言葉と世俗の言葉との間の内的葛藤によっていわば喰らい尽くされて、ほのかに消えてゆく吐息と化してしまった、あのマラルメの詩の言葉に喩えることができるだろう。」(GS VI, 495) まちの名のうちに含むものがマラルメの詩の言葉に喩えられていることは注目に値する。

- (5) cf. Lefeuve 1875.

- (6) 引用文中の傍点による強調はベンヤミンによるものであり、原文ではイタリック体である。

- (7) この部分は、『1900年頃のベルリンの幼年時代』「最終稿」の「ムンメレーレン」(GS IV, 417f.)では削除されている。
- (8) この文章は、アドルノのキルケゴール論のなかに出てくる、「形象」と「神話」に関するキルケゴールの記述に対する、コメンタールの一節である。
- (9) これは、『一方通行路』冒頭に掲げられたエピグラム風の献辞である。2行目と4行目は活字が大きくなっており、1928年の初版では、約2倍の大きさの活字を使用している。
- (10) 1928年発行の単行本の表紙には、右方向へと矢印が向かう「一方通行路」(Einbahnstraße)の道路標識が4本描かれている。
- (11) 1924年のこの出会いをベンヤミンはショーレム宛ての手紙で象徴的に報告している。「葡萄園の夜景も実に素晴らしい。君にもきっと経験があるだろう。葡萄の実と葉が夜の闇のなかに沈んでいて、僕は慎重に——聴きつけられて、追っ払われたらまずいからね——大きな房へと手を伸ばすのだ。しかし、これではまだまだ言い足りない。言い足りないことは、ひょっとしたら、雅歌の註釈のなかに説明が見つかるだろうか。」(GB II, 486)
- (12) この名が生起する場所と存在する場所について主題的に考えようとするれば、わたくしはアガンベンの主張に耳を傾けるべきであろう。

## 参考文献

- Agamben, Giorgio (2001) : *Infanzia e storia: Distruzione dell'esperienza e origine della storia*, Einaudi.  
 — (2008) : *Il linguaggio e la morte: Un seminario sul luogo della negatività*, Einaudi.  
 — (2011) : *Stanze: La parola e il fantasma nella cultura occidentale*, Einaudi.
- Assmann, Aleida (1999) : *Erinnerungsräume: Formen und Wandlungen des kulturellen Gedächtnisses*, C. H. Beck.  
 — (2007) : *Geschichte im Gedächtnis: von der individuellen Erfahrung zur öffentlichen Inszenierung*, Krupp-Vorlesungen zu Politik und Geschichte am Kulturwissenschaftlichen Institut im Wissenschaftszentrum Nordrhein-Westfalen, Bd. 6, C.H. Beck.
- Barthes, Roland (1966) : “Introduction à l'analyse structurale des récits”, *L'Analyse structurale du récit*, Seuil.  
 — (1971) : “Sémiologie et urbanisme”, *L'Architecture d'Aujourd'hui* 153, 11-13.
- Bolz, Norbert und Reijen, Willem van (hrsg.) (1991): *Walter Benjamin*, Campus.
- Buck-Morss, Susan (1989) : *The Dialectics of Seeing: Walter Benjamin and the Arcades Project*, MIT Press.
- Derrida, Jacques (1967) : *De la grammatologie*, Les Éditions de Minuit.  
 — (1987) : *Psyché, Invention de l'autre*, Galilée.  
 — (1993a) : *Khôra*, Galilée.  
 — (1993b) : *Passions*, Galilée.  
 — (1993c) : *Sauf le nom*, Galilée.  
 — (1996) : *Le monolinguisme de l'autre, ou, La prothèse d'origine*, Galilée.  
 — (2003) : *Schibboleth: pour Paul Celan*, Galilée.
- Dudi-Huberman, Georges (2000) : *Devant le temps: Histoire de l'art et anachronisme des images*, Les Éditions de Minuit.
- Düttmann, Alexander Garcia (1989) : *La parole donnée: Mémoire et promesse*, Galilée  
 — (2000) : *The Gift of Language: Memory and Promise in Adorno, Benjamin, Heidegger, and Rosenzweig*, Syracuse U.P.
- Fischer-Defoy, Christine (hrsg.) (2006) : *Walter*

- Benjamin: das Adressbuch des Exils 1933-1940*, Koehler & Amelang.
- Handelman, Susan A. (1991) : *Fragments of Redemption: Jewish thought and literary theory in Benjamin, Scholem, and Levinas.*, Indiana U.P.
- Hillach, Ansgar (2000) : “Dialektisches Bild”, Opitz, Michael und Wizisla, Erdmut (hrsg.) (2000): *Benjamins Begriffe*, Suhrkamp.
- Hirsch, Alfred (1995) : *Der Dialog der Sprachen: Studien zum Sprach- und Übersetzungsdenken Walter Benjamins und Jacques Derridas*, W. Fink.
- Kather, Regine (1989) : “Über Sprache überhaupt und über die Sprache des Menschen”, *die Sprachphilosophie Walter Benjamins*, Peter Lang.
- Larousse, Pierre (1872) : *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle*, tome 8, Administration du Grand dictionnaire universel.
- Lefeuve, Charles (1875) : *Les anciennes maisons de Paris: histoire de Paris, rue par rue, maison par maison*, 5 éd., C. Reinwald/A. Twietmeyer.
- Lévinas, Emmanuel (1961) : *Totalité et infini: essai sur l'extériorité*, Martinus Nijhoff.
- (1974) : *Autrement qu'être, ou, Au-delà de l'essence*, Martinus Nijhoff.
- (1982) : *L'au-delà du verset: lectures et discours talmudiques*, Les Éditions de Minuit.
- Menninghaus, Winfried (1986) : *Schwelkenkunde, Walter Benjamins Passage des Mythos*, Suhrkamp.
- (1995) : *Walter Benjamins Theorie der Sprachmagie*, Suhrkamp.
- Mosès, Stéphane (2006) : *L'ange de l'histoire: Rosenzweig, Benjamin, Scholem*, Gallimard.
- Scholem, Gershom (1967) : *Walter Benjamin und sein Engel : vierzehn Aufsätze und kleine Beiträge*, Suhrkamp.
- (1975) : *Walter Benjamin: Die Geschichte einer Freundschaft*, Suhrkamp.
- Walter Benjamin Archiv (hrsg.) (2006) : *Walter Benjamins Archive: Bilder, Texte und Zeichen*, Suhrkamp.
- Weigel, Sigrid (1996) : *Body-and Image-Space: Re-reading Walter Benjamin*, Routledge.
- 浅井健二郎 (1997) : 「解説」、ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション3』筑摩書房くちくま学芸文庫>
- 内田 樹 (2001) : 『レヴィナスと愛の現象学』せりか書房
- 内村博信 (2001) : 「固有名と翻訳可能性—ヴァルター・ベンヤミンの言語論—」、『ドイツ文学』第106号、日本独文学会、123-133
- 大宮勘一郎 (2008) : 『ベンヤミンの通行路』未来社
- 榎木伸之 (1996) : 「破片の記憶を語る—ベンヤミンの〈翻訳〉と歴史の他者—」、『哲学論集』第25号、上智大学哲学学会、65-79
- (2000) : 「翻訳という出来事—ベンヤミンの思考における翻訳の概念—」、『哲学科紀要』第26号、上智大学文学部、39-78
- (2005) : 「翻訳としての言語—「言語一般および人間の言語について」におけるベンヤミンの言語哲学—」、『広島国際研究』第11巻、広島市立大学国際学部、195-227
- 鹿島 茂 (1996) : 『『パサージュ論』熟読玩味』青土社
- 神谷英二 (2009) : 「遊歩者・記憶・集団の夢—ベンヤミン『パサージュ論』による記憶論構築のために—」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』第17巻第2号、福岡県立大学人間社会学部、67-79
- (2010) : 「固有名と記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』18(2)、福岡県立大学人間社会学部、13-25
- (2011) : 「幼年時代の記憶と集合的記憶(1)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』19(2)、福岡県立大学人

- 間社会学部、65-76
- (2012)：「幼年時代の記憶と集会的記憶(2)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』20(2)、福岡県立大学人間社会学部、15-27
- (2013)：「幼年時代の記憶と集会的記憶(3)」、『福岡県立大学人間社会学部紀要』21(2)、福岡県立大学人間社会学部、35-46
- 川口茂雄 (2012)：『表象とアルシーヴの解釈学—リケールと『記憶、歴史、忘却』—』京都大学学術出版会
- 多木浩二 (2003a)：「場所と境界—ベンヤミン『1900年頃のベルリンの幼年時代』・空間の思考12」、『ユリイカ』35(10)、青土社、30-39
- (2003b)：「街の名前あるいは都市の言語化—ベンヤミンにおける固有名詞・空間の思考13」、『ユリイカ』35(11)、青土社、19-27
- (2004)：『雑学者の夢』岩波書店
- 田中 純 (2000)：『都市表象分析 I』INAX出版
- (2007)：『都市の詩学—場所の記憶と徴候—』東京大学出版会
- 近森高明 (2007)：『ベンヤミンの迷宮都市—都市のモダニティと陶酔経験』世界思想社
- 野村 修 (1993)：『ベンヤミンの生涯』平凡社<平凡社ライブラリー>
- 細見和之 (2009)：『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む—言葉と語りえぬもの—』岩波書店
- 道簇泰三 (1997)：『ベンヤミン解説』白水社
- 村岡晋一 (2008)：『対話の哲学—ドイツ・ユダヤ思想の隠れた系譜』講談社
- 山口裕之 (2003)：『ベンヤミンのアレゴリー的思考』人文書院

\* 本論文は、日本学術振興会・平成25年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）・基盤研究(C)、研究課題名：「まちの物語論」構築のための記憶・忘却・喪失・再生に関する現象学的解釈学的研究（研究代表者：神谷英二、課題番号：25370024）の補助による研究成果の一部である。